

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-233340

(43) 公開日 平成9年(1997)9月5日

| (51) Int.Cl. ⁸ | 識別記号 | 庁内整理番号 | F I | 技術表示箇所 |
|---------------------------|------|--------|---------------|---------|
| H 0 4 N 1/407 | | | H 0 4 N 1/40 | 1 0 1 E |
| G 0 6 T 5/00 | | | G 0 6 F 15/68 | 3 1 0 J |

審査請求 未請求 請求項の数4 O L (全 16 頁)

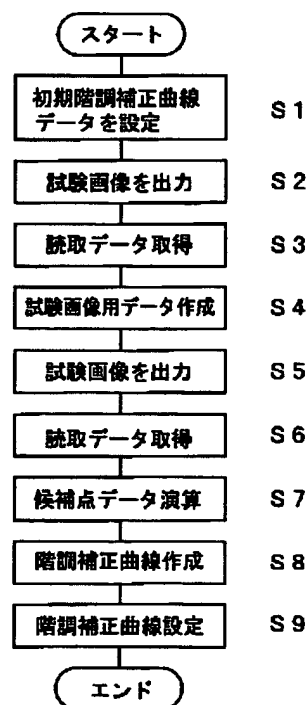
| | | | |
|-----------|-----------------|----------|--|
| (21) 出願番号 | 特願平8-41800 | (71) 出願人 | 000006150 三田工業株式会社 大阪府大阪市中央区玉造1丁目2番28号 |
| (22) 出願日 | 平成8年(1996)2月28日 | (72) 発明者 | 中村 孝二 大阪府大阪市中央区玉造1丁目2番28号 三田工業株式会社内 |
| | | (72) 発明者 | 水野 雅之 大阪府大阪市中央区玉造1丁目2番28号 三田工業株式会社内 |
| | | (72) 発明者 | 奥村 隆一 大阪府大阪市中央区玉造1丁目2番28号 三田工業株式会社内 |
| | | (74) 代理人 | 弁理士 稲岡 耕作 (外1名) |

(54) 【発明の名称】 画像出力装置の出力階調調整方法

(57) 【要約】

【課題】画像出力装置の出力階調調整作業の少なくとも一部を自動化する。

【解決手段】試験画像用データが初期階調補正曲線に従って補正され、この補正後の画像データに基づいて試験画像が形成される (S 1, S 2)。試験画像をスキャナで読み取ることによって読取データが取得される (S 3)。この読取データに基づいて、さらに、新たな試験画像用データが作成され、この作成された試験画像用データに基づいて、もう一度試験画像が形成される (S 4, S 5)。この2回目に形成された試験画像をスキャナで読み取ることにより、読取データが取得される (S 6)。2回の試験画像の読取によって取得された読取データと、初期階調補正曲線と、所定の基準出力曲線とに基づき、候補点データが求められる (S 7)。この候補点データに基づいて、階調補正曲線が作成されて設定される (S 8, S 9)。



【特許請求の範囲】

【請求項1】入力画像データを階調補正曲線に従って補正し、補正後の画像データに基づいて画像を出力する画像出力装置の出力階調を調整するための方法であって、初期階調補正曲線データを上記画像出力装置に設定するステップと、

複数の階調に相当する所定の試験画像用データを画像出力装置に入力して、上記試験画像用データに対応する試験画像を出力させるステップと、

上記出力された試験画像を光学的読取手段によって読み取り、その読取データを取得するステップと、

上記読取データと、入力画像データに対する基準出力階調を表す基準出力曲線データと、上記初期階調補正曲線データとに基づき、上記画像出力装置の入出力特性を上記基準出力曲線データに合致させるべく、当該画像出力装置に適合する階調補正曲線データを演算するステップと、

上記階調補正曲線データを上記画像出力装置に設定するステップとを含むことを特徴とする出力階調調整方法。

【請求項2】上記読取データに基づいて、上記試験画像の下地部分の濃度値に相当する零点入力データを推測し、上記推測された零点入力データの付近の値を最低値として、新たな試験画像用データの組を作成するステップと、

この新たな試験画像用データを上記初期階調補正曲線データが設定された画像出力装置に入力し、2回目の画像出力を行わせて試験画像を形成させるステップと、

上記2回目の画像出力によって形成された試験画像を上記光学的読取手段によって読み取らせ、そのときの読取データを取得するステップとをさらに含み、

上記階調補正曲線データを演算するステップでは、上記2回目の読取データをも用いることを特徴とする請求項1記載の出力階調調整方法。

【請求項3】入力画像データに基づいて画像を出力する画像出力装置であって、

階調補正曲線データを記憶するための階調補正曲線記憶手段と、

入力画像データを上記階調補正曲線記憶手段に記憶された階調補正曲線データに従って補正し、補正後のデータを出力する階調補正手段と、

この階調補正手段によって補正されたデータに基づいて画像を出力する画像出力手段と、

入力画像データに対する基準出力階調を表す基準出力曲線データを記憶する基準出力記憶手段と、

上記階調補正曲線記憶手段に初期階調補正曲線データを設定する手段と、

上記初期階調補正曲線データが上記階調補正曲線記憶手段に設定されている状態で、複数の階調に相当する所定の試験画像用データを上記階調補正手段に与え、上記試験画像用データに相当する試験画像を上記画像出力手段

から出力させる手段と、

上記出力された試験画像を光学的に読み取り、その読取データを出力する光学的読取手段と、

上記読取データと、上記基準出力曲線データと、上記初期階調補正曲線データとに基づき、上記画像出力装置の入出力特性を上記基準出力曲線データに合致させるべく、当該画像出力装置に適合する階調補正曲線データを演算する階調補正曲線演算手段と、

上記階調補正曲線演算手段によって演算された階調補正曲線データを上記階調補正曲線記憶手段に設定する手段とを含むことを特徴とする画像出力装置。

【請求項4】上記読取データに基づいて、上記試験画像の下地部分の濃度値に相当する零点入力データを推測し、推測された零点入力データの付近の値を最低値として、新たな試験画像用データの組を作成する試験画像用データ作成手段と、

上記初期階調補正曲線データが上記階調補正曲線記憶手段に設定されている状態で、上記試験画像用データ作成手段によって作成された試験画像用データを上記階調補正手段に入力し、2回目の画像出力を行わせて試験画像を形成させる手段とをさらに含み、

上記階調補正曲線演算手段は、上記2回目により出力された試験画像を上記光学的読取手段によって読み取らせたとときの読取データをも用いて階調補正曲線データを演算するものであることを特徴とする請求項3記載の画像出力装置。

【発明の詳細な説明】**【0001】**

【発明の属する技術分野】本発明は、画素濃度の階調を表す画像データに基づいて画像を形成する画像形成装置のような画像出力装置の出力階調を調整するための方法、および出力階調の自動調整のための構成を備えた画像出力装置に関する。

【0002】

【従来の技術】従来から、カラー原稿をCCD（電荷結合素子）スキャナなどで光学的に読みとり、赤（R）、緑（G）および青（B）の加法混色による三原色信号に変換し、この信号に基づいて原稿のカラー複写画像を形成するデジタルカラー複写機が用いられている。スキャナから出力されるR、GおよびBの三原色信号は、これらの補色であるシアン（C）、マゼンタ（M）およびイエロー（Y）の減法混色による三原色データに変換される。この三原色データは、たとえば、各色毎にそれぞれ8ビット、256階調のデータであり、各色成分の濃度を表す。このC、MおよびYの三原色データに基づいて、黒（BK）データが生成される。

【0003】たとえば、Cデータに基づく変調を施したレーザビームによって感光体表面が走査され、この感光体の表面にシアンに対応した静電潜像が形成される。この静電潜像は、シアンのトナーを用いてトナー像に現像

され、このトナー像が複写用紙に転写される。同様にして、Mデータ、YデータおよびBKデータに対して、マゼンタ、イエローおよび黒の各色のトナーが重ねて転写され、最後にトナーが加熱および定着されてカラーコピーが達成される。

【0004】複写機の性質上、原稿と複写像とは容易に対比できるから、原稿の再現性に対する要求は厳格である。ところが、現像特性や感光体の感度特性には複数の複写機間で個体差があり、しかもこれらの特性は複写機の使用環境の影響をも受ける。さらには、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の色ごとにも現像特性が異なる。このため、原稿の色彩を忠実に再現するためには、個々の複写機毎に4色のトナーのそれぞれに関して個別に調整を行う必要がある。

【0005】このような調整は、一般に、標準的な色彩の原稿が形成された標準カラー原稿を複写し、その複写物と標準カラー原稿とを目視により対比するようにして行われる。そして、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の各色の階調を補正するための階調補正曲線が作成され、この曲線に対応したテーブルが複写機内のバックアップ付のメモリに格納される。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】しかし、上記のようないわば手作業による調整では、調整作業が煩雑であり、調整に長時間を要するうえ、調整作業毎の個人差のために調整後の出力画像にばらつきが生じるおそれがある。そこで、本発明の目的は、上述の技術的課題を解決し、画像出力装置の出力階調調整作業の少なくとも一部を自動化することができる出力階調調整方法を提供することである。

【0007】また、本発明の他の目的は、出力階調を自動調整するための構成を備えた画像出力装置を提供することである。

【0008】

【課題を解決するための手段】上記の目的を達成するための請求項1記載の発明は、入力画像データを階調補正曲線に従って補正し、補正後の画像データに基づいて画像を出力する画像出力装置の出力階調を調整するための方法であって、初期階調補正曲線データを上記画像出力装置に設定するステップと、複数の階調に相当する所定の試験画像用データを画像出力装置に入力して、上記試験画像用データに対応する試験画像を出力させるステップと、上記出力された試験画像を光学的読取手段によって読み取り、その読取データを取得するステップと、上記読取データと、入力画像データに対する基準出力階調を表す基準出力曲線データと、上記初期階調補正曲線データとに基づき、上記画像出力装置の入出力特性を上記基準出力曲線データに合致させるべく、当該画像出力装置に適合する階調補正曲線データを演算するステップと、上記階調補正曲線データを上記画像出力装置に設定

するステップとを含むことを特徴とする出力階調調整方法である。

【0009】この方法では、初期階調補正曲線データが設定された状態で試験画像用データに基づいて試験画像が形成される。この試験画像を光学的読取手段によって読み取ることにより、試験画像用データに相当する読取データが得られる。試験画像用データと読取データとの対応関係は、初期階調補正曲線データが設定された画像出力装置の入出力特性に他ならない。そこで、読取データ、初期階調補正曲線データおよび基準出力曲線データに基づいて新たな階調補正曲線データが演算される。これにより、画像出力装置の入出力特性に適合した階調補正曲線データを求めることができる。この階調補正曲線データを画像出力装置に設定することによって画像出力装置の出力階調の調整が完了する。

【0010】読取データ、初期階調補正曲線データおよび基準出力曲線データに基づく階調補正曲線データの演算は、データ演算処理によって自動化することができるから、画像出力装置の出力階調調整作業の大部分を自動化することができる。しかも、読取データ、初期階調補正曲線データおよび基準出力曲線データに基づいて階調補正曲線データが演算されるから、調整作業者ごとのばらつきが生じることがない。したがって、画像出力装置の出力階調を確実に最適な状態に調整することができる。

【0011】請求項1記載の発明を実施するための構成を備えた画像出力装置は、請求項3に記載されているように、入力画像データに基づいて画像を出力する画像出力装置であって、階調補正曲線データを記憶するための階調補正曲線記憶手段と、入力画像データを上記階調補正曲線記憶手段に記憶された階調補正曲線データに従って補正し、補正後のデータを出力する階調補正手段と、この階調補正手段によって補正されたデータに基づいて画像を出力する画像出力手段と、入力画像データに対する基準出力階調を表す基準出力曲線データを記憶する基準出力記憶手段と、上記階調補正曲線記憶手段に初期階調補正曲線データを設定する手段と、上記初期階調補正曲線データが上記階調補正曲線記憶手段に設定されている状態で、複数の階調に相当する所定の試験画像用データを上記階調補正手段に与え、上記試験画像用データに相当する試験画像を上記画像出力手段から出力させる手段と、上記出力された試験画像を光学的に読み取り、その読取データを出力する光学的読取手段と、上記読取データと、上記基準出力曲線データと、上記初期階調補正曲線データとに基づき、上記画像出力装置の入出力特性を上記基準出力曲線データに合致させるべく、当該画像出力装置に適合する階調補正曲線データを演算する階調補正曲線演算手段と、上記階調補正曲線演算手段によって演算された階調補正曲線データを上記階調補正曲線記憶手段に設定する手段とを含むことを特徴とするもので

ある。請求項2記載の発明は、上記読取データに基づいて、上記試験画像の下地部分の濃度値に相当する零点入力データを推測し、上記推測された零点入力データの付近の値を最低値として、新たな試験画像用データの組を作成するステップと、この新たな試験画像用データを上記初期階調補正曲線データが設定された画像出力装置に入力し、2回目の画像出力を行わせて試験画像を形成させるステップと、上記2回目の画像出力によって形成された試験画像を上記光学的読取手段によって読み取らせ、そのときの読取データを取得するステップとをさらに含み、上記階調補正曲線データを演算するステップでは、上記2回目の読取データをも用いることを特徴とする請求項1記載の出力階調調整方法である。

【0012】この方法では、2回に渡って試験画像が形成されることになる。1回目の試験画像の形成は、請求項1に記載されているように、所定の試験画像用データに基づいて行われる。この1回目に形成された試験画像に基づき、零点入力データの推測が行われる。零点入力データとは、試験画像の下地部分の濃度値に相当する入力データである。

【0013】画像出力装置の入出力特性によっては、比較的小さな試験画像に対してきわめて低濃度の画像が形成される場合がある。この場合には、1回目の試験データのうちの小さな値のものについては、有意な読取データを得ることができない。そこで、上記の零点入力データが推測され、この零点入力データの付近の値を最低値とする試験画像用データの組が作成される。したがって、この新たな試験画像用データに基づいて試験画像を再度形成させれば、この2回目に形成された試験画像を光学的読取手段によって読み取って得られる読取データは、いずれも有意な値を持つことになる。こうして得られた読取データを1回目に形成された試験画像に対する読取データとともに用いれば、有意な読取データの数が多くなるから、より適切な階調補正曲線データを求めることができる。

【0014】なお、低濃度部の階調表現を良好に行わせるためには、2回目の試験画像用データの組は、低濃度領域に対応するデータを多く含んでいることが好ましい。請求項2記載の発明を実施するための構成を備えた画像出力装置は、請求項4に記載されているように、請求項3に記載の画像出力装置において、上記読取データに基づいて、上記試験画像の下地部分の濃度値に相当する零点入力データを推測し、推測された零点入力データの付近の値を最低値として、新たな試験画像用データの組を作成する試験画像用データ作成手段と、上記初期階調補正曲線データが上記階調補正曲線記憶手段に設定されている状態で、上記試験画像用データ作成手段によって作成された試験画像用データを上記階調補正手段に入力し、2回目の画像出力を行わせて試験画像を形成させる手段とをさらに含み、上記階調補正曲線演算手段は、

上記2回目に出力された試験画像を上記光学的読取手段によって読み取らせたとときの読取データをも用いて階調補正曲線データを演算するものであることを特徴とするものである。

【0015】

【発明の実施の形態】以下では、本発明の実施形態を、添付図面を参照して詳細に説明する。

1. デジタルカラー複写機の内部構成

図1は、本発明の実施の一形態が適用されるデジタルカラー複写機の内部構成を示す簡略化した断面図である。このカラー複写機は、原稿を読み取る光学的読取手段としてのスキャナ部1と、このスキャナ部1からの信号を処理してカラー画像を形成する画像出力手段としてのプリンタ部2とを有している。スキャナ部1の上部には、原稿がセットされる透明板3が設けられている。この透明板3の上方には、さらに、自動原稿送り装置4が設けられている。自動原稿送り装置4は、一対の駆動ローラ5、6と、この一対の駆動ローラ5、6に巻き掛けられた無端状のベルト7とを有している。この原稿送り装置4により、原稿トレイ8にセットされた複数毎の原稿（図示せず）が一枚ずつ透明板3上に給送されて所定位置にセットされる。

【0016】透明板3の下方では、光源11および一次元カラーCCD（電荷結合素子）イメージセンサ12を備えた走査読取部13が、光学モータ14からの駆動力を得て透明板3に沿って往復変位する。これにより、透明板3に載置された原稿の照明走査が達成される。この照明走査の過程で、光源11から発生した光が原稿の表面で反射され、この反射光がレンズ15を介してイメージセンサ12に入射する。その結果、時系列に従って出力されるイメージセンサ12の出力は、原稿の表面に形成された画像を表す信号となる。

【0017】カラーイメージセンサ12からは、赤、緑および青の三原色信号が出力される。この信号は、スキャナ部1が備える図外のアナログ／デジタル変換器によってデジタルデータに変換され、さらに減法混色の三原色であるシアン（C）、マゼンタ（M）およびイエロー（Y）に対応したC、M、Y、データに変換される。このデータは、たとえばそれぞれ8ビットのデータである。このため、C、M、Yデータは、それぞれ256階調で各画素の各色成分の濃度を表すデータとなる。

【0018】このC、MおよびYデータがプリンタ部2に与えられる。プリンタ部2では、与えられたC、MおよびYデータに所定の処理が施され、この三原色データの他に、さらに、黒色に対応したBKデータが作成される。そして、C、M、YおよびBKデータにそれぞれ対応したビデオ信号が作成され、この順でレーザ走査ユニット21に与えられる。

【0019】レーザ走査ユニット21から発生したレーザ光22は、直円筒状の感光体23に導かれ、この感光

体23を露光する。感光体23はその軸線まわりに矢印24方向に向かって回転しており、露光前の感光体23の表面は、帯電器27により一様に帯電させられている。そのため、レーザ光22による露光により、感光体23の表面には、レーザ光22に施された変調に対応した静電潜像が形成されることになる。

【0020】この静電潜像は現像部25でトナー像に現像され、このトナー像は、感光体23の表面に近接して配置された直円筒状の転写ドラム26に巻き付けられた複写用紙（図示せず）に転写される。トナー像が転写された後の感光体23の表面は、クリーニング装置28によってクリーニングされる。現像部25は、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒のトナーをそれぞれ保持した現像カートリッジ25C、25M、25Yおよび25BKを、この順に上から配列させて保持する保持体30と、この保持体30を上下に昇降させる昇降機構31とを有している。この構成により、レーザ走査ユニット21に与えられるC、M、YおよびBKのビデオ信号に対応して、現像カートリッジ25C、25M、25Yおよび25BKが切り替えられて感光体23に当接する。これにより、感光体23の表面には、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の各色のトナー像が順に形成される。

【0021】転写ドラム26は、周速度が感光体23の周速度に等しくなるように、その軸線まわりに矢印35方向に回転駆動される。転写ドラム26の内側には、感光体23の表面のトナーを高周波放電により転写ドラム26に巻き付けられた複写用紙に転写するための転写器36が備えられている。また、転写器36よりも転写ドラム26の回転方向下流側には、コロナ放電によって複写用紙の分離を容易にするための一对の分離器37が配置されている。この分離器37よりもさらに下流側には、トナー像が転写された複写用紙を転写ドラム26から分離するための分離爪38が設けられている。

【0022】転写ドラム26の周囲にはさらに、複写用紙が分離された後の転写ドラム26の表面をクリーニングするためのクリーニング装置39が設けられている。分離爪38およびクリーニング装置39は、転写ドラム26に対して接離自在に構成されている。分離爪38により転写ドラム26から剥離された複写用紙は、搬送部40によって定着部41に導かれ、その表面のトナー像の定着処理が行われる。トナー像が定着させられた複写用紙は、排紙経路42を通して機外に排出される。

【0023】複写用紙は、カセット52、53にスタックされており、給紙ローラ54、55によって繰り出され、搬送ローラ56、57などにより搬送経路58に導かれる。そして、転写ドラム26の近傍でレジストローラ59により給紙タイミングの微調整が行われた後に、転写ドラム26に向けて給紙される。この給紙された複写用紙は、図外のクリップ機構によって把持され、転写ドラム26の回転に伴って、この転写ドラム26に巻き

付けられていく。

【0024】転写ドラム26に巻き付けられた複写用紙は、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の各色のトナー像の転写が終了する以前には、転写ドラム26の表面に保持される。また、シアン、マゼンタおよびイエローの各トナー像が複写用紙上に形成される期間には、分離爪38およびクリーニング装置39は転写ドラム26から分離した位置に退避させられる。そして、3色のトナー像が複写用紙に転写されると、分離爪38およびクリーニング装置39が転写ドラム26に接触し、分離器37での放電が行われる。

【0025】4色目である黒色のトナー像が転写された複写用紙の先端が分離爪38に到達すると上記クリップ機構の把持が解かれる。そして、分離爪38で分離された複写用紙は、搬送部40を介して定着部41に導かれる。もちろん、いずれか1色のトナーによる単色の複写が行われるときには、分離爪38およびクリーニング装置39は当初から転写ドラム26に当接させられ、クリーニング装置39にまで複写用紙が至ることはない。

2. デジタルカラー複写機の電氣的構成

図2は上記のカラー複写機の要部の電氣的構成を示すブロック図である。スキャナ部1からは、C、MおよびYの三原色データが生成される。これらのデータは、黒生成部61に与えられ、C、MおよびYデータに補正が加えられるとともに、黒色のトナーに対応したBKデータが生成される。

【0026】C、M、YおよびBKでは、色修正部62でいわゆるマスキング処理などが施された後に、セレクト部63に与えられる。セレクト部63は、レーザ走査ユニット21に与えるべき信号に対応したいずれか一色のデータを選択して出力し、階調補正部64に与える。階調補正部64では、感光体23の感度特性や現像部25の現像特性などに対応して各色ごとに階調補正が施される。すなわち、各色ごとのデータが個別に増減される。

【0027】この階調補正後のデータは、上述のレーザ走査ユニット21に与える信号を作成するプリンタ出力部66に与えられる。各部の制御や演算は、CPU（中央処理装置）70で行われる。CPU70は、バス71に接続されており、バス71には、上記の黒生成部61、色修正部62、セレクト部63、および階調補正部64などが接続されている。CPU70にはまた、動作プログラムなどが記憶されたROM72、ワークエリアなどとして用いられるRAM73、ならびに階調補正曲線を表す階調補正曲線データが記憶されるバックアップ電源付きのRAM74が接続されている。階調補正曲線とは、階調補正部64が階調補正処理を実行する際に参照する曲線であり、セレクト部63からの入力階調とプリンタ出力部66に与えるべき出力階調との対応関係を表すものである。この階調補正曲線データを適切に設定す

る処理が、出力階調調整処理である。階調補正部64による処理は、実際には、CPU70がRAM74内の階調補正曲線を参照して実行するソフトウェア処理によって実現される。

【0028】CPU70には、さらに、たとえばスキャナ部1の上面に設置された操作部75からの信号が入力されている。この操作部75には、図外の調整モードキーが設けられており、この調整モードキーが操作されると、階調補正曲線データを作成するための調整モードに移行する。調整モードでは、C、M、YおよびBKの4色のそれぞれに対応した4種類の試験データがプリンタ出力部66に与えられ、4回の画像形成動作が試験的に実行される。これにより、各色についての試験画像が形成される。

3. 出力階調調整に用いる試験画像

図3は、出力階調の調整に際して形成される試験画像の例を示す図である。出力階調の調整は、たとえば、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の4色に際して、1色ずつ順に実行される。そこで、階調調整の対象の色に関し、16段階のグレースケールが形成される。具体的には、段階的に濃度が高くなる16個の長方形領域TP1、TP2、……、TP16が形成される。1つの長方形領域は、たとえば、縦200画素、横512画素で構成されており、1つの長方形領域内の各画素は等しいデータに基づいて形成されている。なお、図3においては、各領域の濃度の高低が斜線の密度によって表されている。

4. 出力階調調整処理

図4は、出力階調調整処理の流れを説明するためのフローチャートであり、図5は出力階調調整処理の原理を説明するための図である。出力階調調整処理は、RAM74に適切な階調補正曲線データを設定することによって達成される。より具体的には、スキャナ部1において読み取られた画像の濃度がプリンタ部2による出力画像中において適切に再現されるように、階調補正部64の入出力特性（階調補正曲線）が定められる。

【0029】まず、階調補正部64が参照すべき階調補正曲線データとして、図5(b)に示す初期階調補正曲線L1に相当する初期階調補正曲線データがRAM74に設定される（ステップS1）。初期出力階調調整曲線データとしては、たとえば、入力データと出力データとが正比例するようなリニアな直線に相当するデータが設定されてもよく、また、その時点で設定されている階調補正曲線データを初期階調補正曲線データとして採用してもよい。複写機の生産段階で行われる調整では、入力データと出力データとが正比例するような直線が初期階調補正曲線として採用され、サービスマンによる複写機の調整作業時には、その時点で設定されている階調補正曲線が初期階調補正曲線として採用されるのが好ましいと考えられる。

【0030】次に、CPU70は、ROM72に予め記憶されている試験画像用データを読み出し、階調補正部64に入力する。その結果、図3に示すような試験画像が複写用紙上に形成される（ステップS2）。試験画像用データは、たとえば、入力画像データが8ビット、256階調で濃度を表現するものであれば、{10, 22, 34, 46, 58, 70, 82, 94, 106, 125, 144, 163, 182, 201, 220, 239}のようなほぼ全階調区間に及ぶ離散的なデータであることが好ましい。また、試験画像は単色のグレースケールではあるが、フルカラーコピーの場合と同様に、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の各トナーの転写動作が行われることが好ましい。これは、転写回数が1回の場合と4回の場合とでは、たとえ単色の画像であっても濃度が異なるためである。4回の転写動作を行うことによって、複写機の現実の使用状態に近い状態が実現される。なお、1枚の用紙上の異なる領域に、シアン、マゼンタ、イエローおよび黒の各試験画像を一気に形成するようにしてもよい。

【0031】形成された試験画像は、複写機本体1の上面の透明板3上に載置され、スキャナ部1の働きによって読み取られる（ステップS3）。その結果、図5(a)に示すように、試験画像用データのそれぞれに対応した読取データが取得される。たとえば、図3の試験パターン画像の長方形領域TP_i（*i*=1, 2, 3, …… , 16）のそれぞれの領域内において、16画素×16画素の正方形領域内の複数の画素のデータの平均値を読取データとしてもよい。これにより、画素間の濃度むらの影響を排除することができる。

【0032】次に、試験画像を再度出力するために、試験画像用データが新たに作成される（ステップS4）。この新たに作成される試験画像用データとは異なるデータである。この新たに作成された試験画像用データを用いて試験画像が出力され（スナップS5）、さらにこの試験画像の各濃度領域の読取データが取得される（ステップS6）。こうして、2回に渡る試験画像の出力およびその読取りによって、多くの読取データを得ることができる。

【0033】取得された読取データは、次に、図5(c)に示す基準出力曲線L2に相当する基準出力曲線データと照合される。基準出力曲線L2は、階調補正部64への入力データに対して本来得られるべき濃度データを対応付けた曲線であり、この基準出力曲線L2に相当するデータは、予めROM72に格納されている。出力階調調整処理が完了した複写機においては、上記の試験画像用データに基づいて試験画像を形成させ、これをスキャナ部1で読み取った場合に、試験画像用データと読取データとの関係は、基準出力曲線L2に従う。

【0034】CPU70は、初期階調補正曲線データ、読取データ、および基準出力曲線データに基づいて、階

調補正曲線データの作成の基礎となる候補点データを演算する(ステップS7)。より具体的には、読取データに相当する基準出力曲線L2の入力値を入力データとし、当該読取データに対応する試験画像データに相当する初期階調補正曲線L1の出力値を出力データとすることで、入力データと出力データとの対からなる候補点データが定められる。

【0035】候補点データは、図5(d)に示されているとおりである。すなわち、基準出力曲線L2のグラフの下に候補点データのグラフを配置し、候補点データのグラフの左に初期階調補正曲線L1のグラフを配置し、初期階調補正曲線L1のグラフの上に読取データのグラフを配置する。この場合に、読取データ点から水平および垂直に直線を引き、これら直線を、基準出力曲線L2および初期階調補正曲線L1との各交点で直角に折り曲げ、この折り曲げられた2本の直線の交点を候補点とする。

【0036】たとえば、試験画像データtdに対する初期階調補正曲線L1の出力値がioであるとする。また、試験画像用データtdに対する読取データがrdであったとする。一方、基準出力曲線L2においては、入力階調データがbiのときに、出力階調がrdになるものとする。この場合、階調補正部64が、入力データbiに対して出力データioを出力すれば、階調rdの適切な濃度の画素が出力される。したがって、入力データbiに対して出力データioを対応付ければ、この点は階調補正曲線上に乗るべき候補点となる。

【0037】こうして得られた候補点データに基づいて、CPU70は、ROM72内の所定のプログラムに従って、候補点の間を補間したり、入力データの増加に対して出力データが単調に増加するように調整したり、入力データに対する出力データの変化が急激にならないように調整したりして、階調補正曲線データを作成する(ステップS8)。

【0038】同様な処理がシアン、マゼンタ、イエローおよび黒の4色に関してそれぞれ行われ、4色分の階調補正曲線データがRAM74に設定されることによって(ステップS9)、出力階調調整処理が完了する。なお、複写モードとして、たとえば、文字画像の複写に適した文字モード、地図画像の複写に適した地図モード、写真画像の複写機に適した写真モード、および文字と写真が混在した画像の複写機に適した文字/写真モードなどが設定可能である場合には、各モードに関してそれぞれ4色分の階調補正曲線データが求められてRAM74に設定されることが好ましい。この場合には、ROM72には、各モードの各色ごとに、基準出力曲線が予め記憶させられることになる。

5. 2回目の試験画像のためのデータ作成

図6は、図4のステップS4において実行される2回目の試験画像のための試験画像用データ作成処理を説明す

るための図である。試験画像用データの作成に際し、零点入力データの推測が行われる。零点入力データとは、試験画像の下地部分の濃度(下地データ)に対応した画像データである。下地データは、1回目の試験画像の読取の際に、下地部分に相当するスキャナ部1の出力をサンプリングすることによって取得される。

【0039】1回目の試験画像の形成に際しては、ROM72に記憶された所定の試験画像用データが適用されるのであるが、感光体23やトナーの特性によっては、比較的小さな画像データに対しては、十分な濃度の画像を形成できない場合がある。そこで、1回目の試験画像の読取結果に基づいて、零点入力データ推測処理が行われる。

【0040】図6(a)には、1回目の試験画像に相当する試験画像用データと読取データとの関係の例が示されている。この例では、試験画像用データ「10」、「22」および「34」に対しては、スキャナ部1の出力は下地データ(=0)であり、次の試験画像用データ「46」に対して、読取データは、はじめて下地データよりも大きくなる。したがって、零点入力データは、「34」と「46」との間にある。

【0041】そこで、次の手順1ないし手順4に従って、CPU70は、2回目の試験画像を形成するための試験画像用データを作成する。

手順1

読取データが最初に下地データよりも大きくなった点をB点とし、その直前の点をA点とする。さらに、B点よりも大きな試験画像データに相当する点であって、B点よりも読取データがはじめて大きくなった点をC点とする。もしも、最小の試験画像用データ「10」に相当する読取データが下地データよりも大きい場合には、この点がB点となるので、原点(0, 0)がA点とされる。

【0042】手順2

次に、A点とB点とを結ぶ線分ABの傾きと、B点とC点とを結ぶ線分BCの傾きとが求められる。これらの線分ABおよびBCの傾きに基づいて、2通りの方法のいずれかの手法で零点入力データが推測され、2回目の試験画像用データが作成される。

【0043】すなわち、線分ABの傾きが線分BCの傾き以上の場合には、図6(b)のような状態となり、零点入力データは、A点とB点との間に存在すると考えられる。そこで、線分ABを4等分する点a, b, cに相当するデータ値ax, bx, cxが2回目の試験画像用データの最初の3つのデータとされる。一方、線分ABの傾きが線分BCの傾きよりも小さい場合には、図6(c)のような状態となる。この場合には、零点入力データは、線分BCの延長線と、(読取データ)=(下地データ)の直線との交点であるD点の付近にあると考えられる。そこで、線分BDを4等分する点を点a, b, cとし、これらの点に相当するデータ値ax, bx, cxが

2回目の試験画像用データの最初の3つのデータとされる。つまり、零点入力データの付近のデータ a_X が、2回目の試験画像用データの組のうちの最小値となる。

【0044】手順3

上記のようにして零点入力データを推測することによって、2回目の試験画像用データの最初の3つのデータ a_X 、 b_X 、 c_X が定まると、2回目の試験画像用データとすべき他のデータが定められる。具体的には、1回目の試験画像用データと重複しないように定められたデータの集合{16, 28, 40, 52, 64, 76, 88, 100, 112, 133, 152, 171, 190, 210, 229, 248}の中から、データ c_X よりも大きな試験画像用データとして採用される。ただし、データ a_X 、 b_X 、 c_X を含めた総データ数が16を越える場合には、総データ数が16個になるように、大きなデータが試験画像用データから排除される。

【0045】このようにして作成される2回目の試験画像データには、低階調部のデータが多く含まれることになる。したがって、1回目と2回目の試験画像用データに基づいて形成された試験画像をそれぞれスキャナ部1で読み取ることによって、低階調部において特に詳細な読取データを得ることができる。したがって、低階調部においては、多くの候補点データを得ることができる。たとえば、中間調画像の再生には、低階調部の表現がきわめて重要であるから、低階調部において多くの候補点データを得ることによって、より適切な階調補正曲線データを作成することができる。

6. 階調補正曲線データ作成処理

図7は、図4のステップS8における階調補正曲線データ作成処理を説明するためのフローチャートである。まず、候補点データの逆転補正が行われる(ステップS81)。入力画像データが大きいほど出力画像データが大きくななければならないから、階調補正曲線は、入力データの増加に伴って出力データが単調に増加するような単調増加曲線でなければならない。そこで、入力データの小さいものから順に候補点をたどっていき、入力データの大小関係と出力データの大小関係とが逆転していれば、候補点データが修正される。具体的には、候補点データの入力データはそのまま、出力データを増減することによって、逆転が排除される。

【0046】次に、逆転補正がされた候補点データに基づき、候補点の間の全ての入力データ値に対応した出力データ値を与えるための補間が行われ、暫定的な階調補正曲線である第1予備階調補正曲線が作成される(ステップS82)。たとえば、画像データが8ビット(256階調)であり、プリンタ出力部66が10ビット(1024階調)の画像データを入力として各画素の濃度を表現することができるものであるとする。この場合には、0～255の範囲の入力データの各値に対して、0～1023の範囲内の出力データ値が対応付けられる。ただし、入力データの下限值「0」に対しては出力デー

タの下限值「0」が対応付けられ、入力データの上限值「255」に対しては、出力データの上限值「1023」が対応付けられる。

【0047】第1予備階調補正曲線は、逆転補正がなされた候補点データに基づいて作成されるのであるが、上記の補間処理の結果、第1予備階調補正曲線には、単調増加曲線ではない箇所が発生する場合がある。そこで、このような箇所を単調増加曲線に修正するための処理が行われる。こうして、第2番目の暫定的な階調補正曲線である第2予備階調補正曲線が得られる。(ステップS83)。

【0048】次に、第2予備階調補正曲線の高階調領域部を補正するための処理が施される(ステップS84)。この補正は、高階調領域部における第2予備階調補正曲線の急激な傾きの変化を緩和し、第3番目の暫定的な階調補正曲線である第3予備階調補正曲線を作成するための処理である。この処理は、出力データは、入力データの変化に対してなめらかに変化すべきであるとの経験的事実に基づいている。階調補正曲線の傾きが急激に変化すると、とりわけ中間調画像の再生に支障を来すおそれがある。すなわち、中間調画像中に、いわゆる疑似輪郭が発生するおそれがある。

【0049】第3予備階調補正曲線には、ステップS84の補正処理の結果、単調増加曲線でない箇所が生じる場合がある。そこで、このような箇所を単調増加曲線に修正するための処理が行われ、第4番目の暫定的な階調補正曲線である第4予備階調補正曲線が作成される。

(ステップS85)。そして、最後に、第4予備階調補正曲線に対して、曲線の各部の急激な階調変化や階調飛びを緩和するための修正が行われ(ステップS86)、階調補正部64によって参照されるべき階調補正曲線が完成する。この階調補正曲線を表すテーブルが、RAM74に格納される。階調補正部64は、入力画像データの値に基づいて階調補正曲線のテーブルを参照し、このテーブルから出力画像データを読み出す。

7. 逆転補正

図8は、図7のステップS81で行われる逆転補正を説明するための図である。逆転補正は、次の手順に従って実行される。

【0050】手順1

候補点データは、上記のように、入力データと出力データとの組からなる。そこで、まず、候補点データは、入力データの値に基づき、昇順にソートされる。そのうえで、小さい方から3番目の入力データに相当する候補点が注目点(図8においてシンボル「◎」で示す。)として設定される。

【0051】手順2

次に、注目点の直前の候補点(図8においてシンボル「○」で示す。)および注目点の直後の候補点(図8においてシンボル「●」で示す。)に対する注目点の関係

が調べられる。より具体的には、出力データの領域が、図8(a)に示すように、直前の候補点の出力データよりも小さな領域SB、直前の候補点の出力データと直後の候補点の出力データと間の領域SA、直後の候補点の出力データよりも大きな領域SCに分けられ、注目点の出力データがいずれの領域に属するかが判断される。

【0052】図8(b)は、注目点の入力データが、直前および直後の候補点の各出力データの間の領域SAに属する場合を表す図である。この場合には、注目点のデータには修正は加えられない。図8(c)は、注目点の出力データが、直前の候補点の出力データよりも小さく、したがって、領域SBに属する場合を表す図である。この場合には、注目点の出力データは、直前の候補点と直後の候補点とを結ぶ線分81上まで引き上げられる。

【0053】図8(d)および図8(e)は、注目点の出力データが、直後の候補点の出力データよりも大きく、したがって、領域SCに属する場合の処理を表す図である。この場合には、直前の候補点のさらに前の候補点(図8においてシンボル「△」で示す。)が併せて参照される。より具体的には、直前の候補点とそのさらに前の候補点とを通る直線82が想定される。

【0054】もしも、図8(d)に示すように、注目点が直線82よりも下にある場合、すなわち、注目点の出力データが注目点の入力データに相当する直線82上の出力データよりも小さい場合には、当該注目点の出力データに対しては、修正を施さない。これは、注目点の直後の候補点のデータに誤りがある可能性が高いと考えられるからである。

【0055】一方、図8(e)に示すように、注目点が直線82よりも上にある場合、すなわち、注目点の出力データが注目点の入力データに相当する直線82上の出力データよりも大きい場合には、その注目点の出力データを引き下げるような修正が行われる。より具体的には、注目点の入力データとその直前および直後の候補点の各入力データとの差 a_1 、 a_2 の比に基づいて、注目点の出力データが修正される。すなわち、修正後の注目点の出力データと注目点の入力データに相当する直線82および81上の各出力データとの差 b_1 、 b_2 に関して、次式が成立する。

$$【0056】b_1 : b_2 = a_1 : a_2$$

手順3

ある注目点についての上記手順2の処理が終了したら、注目点を次の候補点に移して、手順2の処理が実行される。注目点が最終候補点である場合には、処理を終了する。

【0057】なお、原点(0, 0)および最終点(255, 出力データの上限值)は、必要不可欠な点であるので、これらの2点は候補点として追加される。

8. 候補点の補間

図9および図10は、逆転補正がされた候補点データの

補間処理(図7のステップS82)を説明するための図である。X軸は、入力データ、Y軸は、出力データである。

【0058】候補点データを補間して第1予備階調補正曲線を作成するための手順は次のとおりを表す。

手順1

まず、図9(a)に示すように、最初の候補点(原点)をA点とし、2つ目の候補点をB点として、B点が極となる2次曲線83でA点とB点との間を補間する。

【0059】手順2

次に、B点と、B点からX軸方向への距離が4よりも大きい候補点のうち、B点に最も近い候補点をC点とし、B点とC点との間を直線84で補間する。図9(b)に示されているように、B点とC点を通る直線84の傾きが1以上である場合(X軸に対する角度が45度以上の場合)には、B点のX座標から4を減じたX座標に相当する二次曲線上の点 α と、B点のX座標に4を加えたX座標に相当する直線BC上の点 β との間をさらに直線85で補間する。そして、点 β を改めてB点とする。これにより、二次曲線83と直線84との間が、直線85によってなめらかに接続され、急激な階調変化が緩和される。

【0060】手順3

さらに、B点をA点に、C点をB点に、その右隣の候補点をC点に、さらにその右隣の候補点をD点に、それぞれ設定して、図10に示す補間処理を行う。すなわち、まず、直線ABと直線BCとのなす角度 $\angle ABC$ が求められる。この角度 $\angle ABC$ が120度以上であれば、図10(a)に示す処理が行われ、角度 $\angle ABC$ が120度未満であれば、図10(b)に示す処理が行われる。

【0061】図10(a)に示す処理では、BC間が直線86で補間され、さらに、線分ABの中点と線分BCの中点とが直線87で再補間され、線分BCの中点が改めてB点とされる。図10(b)に示す処理では、A点、B点およびC点を通る二次曲線88と、B点、C点およびD点を通る二次曲線89とが想定される。そして、この2本の二次曲線88および89の間を通る曲線100によって、B点とC点との間が補間される。具体的には、入力データとB点およびC点の各入力データとの差 a_1 、 a_2 の比が、補間後の出力データと曲線88および89上の各出力データとの差 b_1 、 b_2 に等しくなるように補間後の出力データが定められる。

【0062】手順4

D点が最終候補点でなければ、手順3に戻る。D点が最終候補点であれば、C点とD点との間を直線で補間して、処理を終了する。こうして、第1予備階調補正曲線が完成する。

9. 単調増加曲線への修正

図11は、単調増加曲線への修正のための処理(図7のステップS83、S85に対応。)を説明するための図

である。X軸は入力データ、Y軸は出力データである。単調増加曲線への修正は、上記の第1予備階調補正曲線および第3予備階調補正曲線に対して行われる。図11(a)は、変更前の第1または第3予備階調補正曲線の例を示し、図11(b)は、処理の結果として得られる第2または第4予備階調補正曲線の例を示す。

【0063】単調増加曲線への修正のための処理は、次の手順に従って実行される。

手順1

まず、処理対象曲線（第1または第3予備階調補正曲線）の原点（0，0）に注目点が設定される。

手順2

次に、入力データの値を1ずつ増加させながら、注目点を順次ずらしていき、極大点が検索される。極大点とは、注目点のY座標がその直前の点のY座標よりも大きくなるような点である。極大点が見つからなければ、単調増加曲線への修正のための処理を終了する。

【0064】手順3

極大点が見つかった場合には、次のような処理が行われる。すなわち、図11(b)に示すように、極大点をA点とし、A点以降最初に表れる極小点をB点とする。また、B点以降の処理対象曲線上の点であって、A点とY座標が等しくなる最初の点をC点とする。さらに、C点以降の点であって、C点およびB点の各Y座標の差の分だけC点のY座標よりも大きなY座標を持つ最初の点をD点とする。

【0065】A点とC点との間は、直線ADと直線ACとの間を2等分する直線90に修正する。C点とD点との間は、直線ADと処理対象曲線との間を2等分する曲線91に修正する。こうして、A点とD点との間が単調増加曲線に修正される。

手順4

注目点をD点の右隣の点に設定して、手順2に戻る。D点が最終点（入力データ「255」の点）であれば、処理を終了する。

10. 高階調領域の修正

図12および図13は、高階調領域に関する曲線の修正処理（図7のステップS84に対応）を説明するための図である。X軸は入力データを表し、Y軸は出力データを表す。

【0066】候補点の補間処理により、高階調領域において曲線の傾きが極端に変化する箇所が現れることが経験上明らかになっている。そこで、このような傾きの急変を緩和するための処理が次のようにして行われる。

手順1

まず、X軸とY軸とのスケールが等しくなるように、座標系の圧縮が行われる。たとえば、セレクタ部63（図2参照）から階調補正部64に与えられる画像データが0～255の256階調で各画素の濃度を表現したものであり、プリンタ出力部66が0～1023の1024

階調で各画素の濃度を表現するための信号をレーザ走査ユニット21に与えるものである場合には、階調補正部64は8ビットの入力画像データを10ビットの出力画像データに変換することになる。この場合、出力データに相当するY軸は、1/4に圧縮される。

【0067】手順2

圧縮された座標平面上での第2予備階調補正曲線の最終点（255，255）をC点とし、C点の左隣の候補点をB点とし、B点の左隣の候補点をA点とする。この場合、候補点とは、候補点データの入力データに相当する第2予備階調補正曲線上の点を指す。

【0068】手順3

C点を固定しておき、A点およびB点を1点ずつ左にずらし（直前の候補点をたどっていく）、角度 $\angle ABC$ の大きさが150度よりも小さくなる最初のA点およびB点を検索する。図12(a)は、角度 $\angle ABC$ が150度以上の場合を示し、図12(b)は、角度 $\angle ABC$ が150度よりも小さい場合を示す。

【0069】経験的な事実から、最終的に設定されるべき階調補正曲線は、一般に、高階調領域においては入力データに対する出力データの変化の割合が小さく、中階調領域においては入力データに対する出力データの変化の割合が比較的大きいことが判っている。そのため、中階調領域から高階調領域に移る付近において、曲線の傾きの急変が生じる。このように傾きが急変する箇所を探し出すのが手順3である。

【0070】ただし、A点のX座標が170よりも小さくなった時点で探索を打ち切り、座標系の圧縮を解除して、高階調領域についての補正処理を終了する。

手順4

角度 $\angle ABC$ が150度よりも小さい場合には、B点とC点とを結ぶ線分BCの長さをaとし、補間の範囲を示す円の半径rを以下の式に基づいて算出する。

【0071】

【数1】

$$r = \frac{(360-150) - \angle ABC}{120} \times a$$

【0072】そして、図12(c)に示すように、B点を中心とした半径rの円（補間の範囲を表す円）92と第2予備階調補正曲線との交点であるA'点、および円92と線分BCとの交点であるC'点を求める。上記数1の式は、 $\angle ABC = 90$ 度のときに $r = a$ となり、 $\angle ABC = 150$ 度のときに $r = a/2$ となるように定められている。これにより、曲線の傾きの急変が緩和される。たとえば、 $\angle ABC = 90$ 度の場合には曲線の傾きの変化が最も大きい場合に相当するが、この場合に、補完の範囲を示す円の半径rがaとされることにより、滑らかな補完が可能になる。

【0073】手順5

直線ABの傾き、直線BCの傾き、直線A' Bの傾きに
応じて、次の手順6または手順7のいずれかの処理を行
う。すなわち、

ABの傾き > BCの傾き かつ ABの傾き > A' Bの
傾き

または

ABの傾き < BCの傾き かつ ABの傾き < A' Bの
傾き

が成立するならば、手順6の処理を行う。上記の条件が
成立しない場合には、手順7の処理が行われる。

【0074】手順6

図13(a)に示すように、A'点とC'点との間が直線
93で補間される。

手順7

図13(b)に示すように、A'点を通り直線A' Bと直
交する直線と、C'点を通り直線BC'と直交する直線
との交点Dを中心に持つ円弧94(A'点およびC'点
でそれぞれ直線A' Bおよび直線BCと接する円弧)に
より、A'点とC'点との間を補間する。

【0075】手順8

A'点をC点とし、このC点の左隣の候補点をB点と
し、このB点の左隣の候補点をA点として、手順3に戻
る。

11. 階調変化・階調飛びの緩和

図7のステップS86における処理は、階調補正曲線を
なめらかな曲線とするための処理であり、具体的には、
次のような手順で実行される。

【0076】手順1

入力データが連続している3点A、B、Cのデータに基
づき、線分ABおよび線分BCの傾きを求める。

手順2

線分ABおよびBCの傾きの差に基づき、傾きの変動を
求める。

【0077】手順3

傾きの変動が5以上の場合には、A点とB点のY座標
(出力データ)の平均値をB点のY座標(出力データ)
とする。

手順4

傾きの変動値が曲線上の至るところで5未満になるま
で、手順1ないし3を繰り返す。

12. 処理の実例

図14および図15は、マゼンタに対する階調補正曲線
を作成した場合の実例の処理結果を表す図である。図1
4(a)は、試験画像をスキャナ部1で読み取って得られ
る読取データを示し、図14(b)は、初期階調補正曲線
を示し、図14(c)は、基準出力曲線を示す。これらの
読取データ、初期階調補正曲線、および基準出力曲線に
基づいて得られた候補点データは、図14(d)に示され
ている。図14(d)から、2回に渡る試験画像の形成お
よび読取りを行った結果、低階調部において十分な数の

候補点が得られていることが理解される。

【0078】図14(d)の候補点データに対して逆転補
正処理を施すことによって、図15(a)に示す候補点デ
ータが得られ、この逆転補正後の候補点データに対して
補間処理、単調増加曲線への変更処理、高階調部の修正
処理などを施すことによって、最終的に、図15(b)に
示される単調増加曲線が階調補正曲線として作成されて
いる。

13. まとめ

以上のように本実施形態によれば、試験画像を読み取っ
て得られる読取データ、初期階調補正曲線データおよび
基準出力曲線データに基づき、階調補正曲線データが自
動的に演算されて設定される。したがって、出力階調調
整作業の大部分を自動化することができうえ、調整作
業者の熟練度などに関係なく適切な調整を確実に行うこ
とができる。

【0079】また、1回目の試験画像の読取データに基
づいて零点入力データを推測し、この零点入力データの
付近の値を最小値とする新たな試験画像用データを用い
て2回目の試験画像の形成およびその読取を行っている。
そのため、有意な読取データを多数取得することが
できるので、試験画像の形成を1回しか行わない場合
や、1回目の試験画像の読取データを考慮せずに2回目
の試験画像用データを設定するような場合に比較して、
より適切な階調補正曲線データの演算が可能になる。と
くに、2回目の試験画像用データには、低階調部に相当
するデータが比較的多く含まれるので、低階調部におけ
る出力階調の調整が適切になされるという利点がある。

【0080】さらに、読取データ、初期補正曲線データ
および基準出力曲線データに基づいて求められた候補点
データを用いて階調補正曲線データを作成する過程は、
候補点データの逆転補正、単調増加曲線への修正処理、
一次曲線および二次曲線を用いた候補点間の補間処理な
どの比較的簡単な処理を含んでいるに過ぎない。そのた
め、階調補正曲線データの演算に長い時間を要すること
がないから、出力階調調整処理を短時間で完了すること
ができる。

14. 他の実施形態

上記の実施形態においては、カラーデジタル複写機を
例にとって説明したが、本発明はカラーデジタル複写
機以外にも、たとえば、モノクロ複写機や、カラープリ
ンタのように、画像データに基づいて画像を出力する装
置に広く適用することができるものである。

【0081】その他、特許請求の範囲に記載された技術
的事項の範囲で種々の変更を施すことが可能である。

【0082】

【発明の効果】請求項1または請求項3記載の発明によ
れば、階調補正曲線データの演算をデータ演算処理によ
って自動化することが可能になるので、画像出力装置の
出力階調調整のための大部分の作業を自動化することが

できる。その結果、出力階調調整作業を短時間で完了することができるうえ、調整作業者の熟練度等によらずに画像出力装置を確実に適切な状態に調整することができる。

【0083】請求項2または請求項4記載の発明によれば、1回目に形成された試験画像の読取データに基づいて、有意な読取データを得ることができる範囲で2回目の試験画像の形成のための試験画像用データが作成される。その結果、階調補正曲線データの演算のために、多数の有意な読取データを用いることができる。これにより、より適切な階調補正曲線データが演算されることになるから、出力階調調整処理の正確性を増大することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の実施の一形態が適用されるカラーディジタル複写機の内部構成を示す簡略化した断面図である。

【図2】カラーディジタル複写機の要部の電氣的構成を示すブロック図である。

【図3】試験画像を例示する図である。

【図4】出力階調調整処理の流れを説明するためのフローチャートである。

【図5】階調補正曲線の作成の原理を説明するための図である。

【図6】2回目の試験画像のためのデータを作成する処理を説明するための図である。

【図7】候補点データに基づいて階調補正曲線データを作成するための処理の流れを説明するためのフローチャートである。

【図8】候補点の逆転補正処理を説明するための図である。

【図9】候補点の補間処理を説明するための図である。

【図10】候補点の補間処理を説明するための図である。

【図11】単調増加曲線へ修正するための処理を説明するための図である。

【図12】高階調領域部分の補正処理を説明するための図である。

【図13】高階調領域部分の補正処理を説明するための図である。

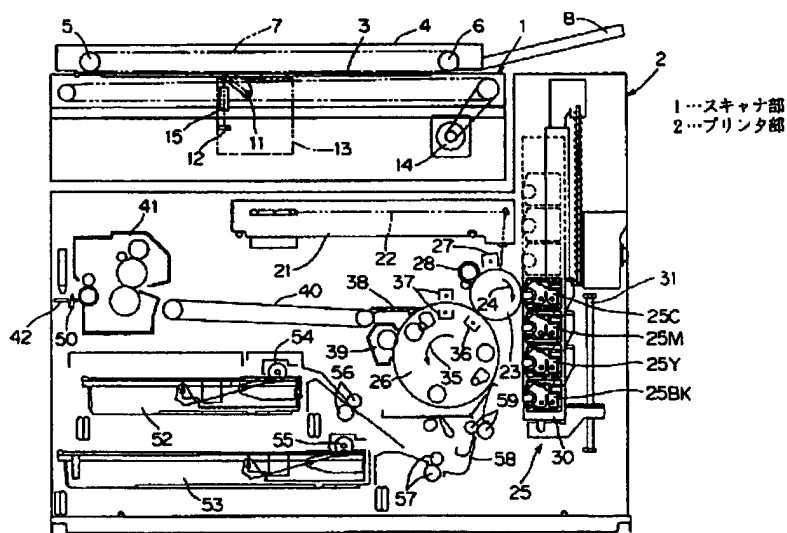
【図14】階調補正曲線の作成の実例を示す図である。

【図15】階調補正曲線の作成の実例を示す図である。

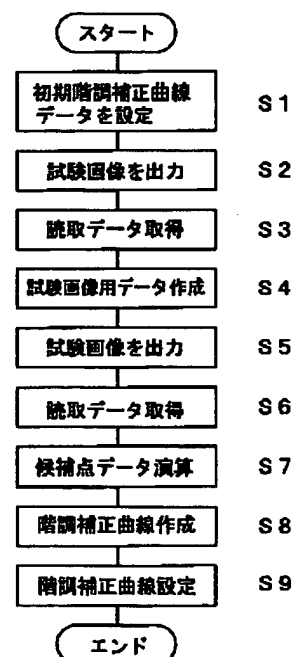
【符号の説明】

- 1 スキャナ部
- 2 プリンタ部
- 6 4 階調補正部
- 6 6 プリンタ出力部
- 7 0 CPU
- 7 2 ROM
- 7 3 RAM
- 7 4 バックアップ付のRAM

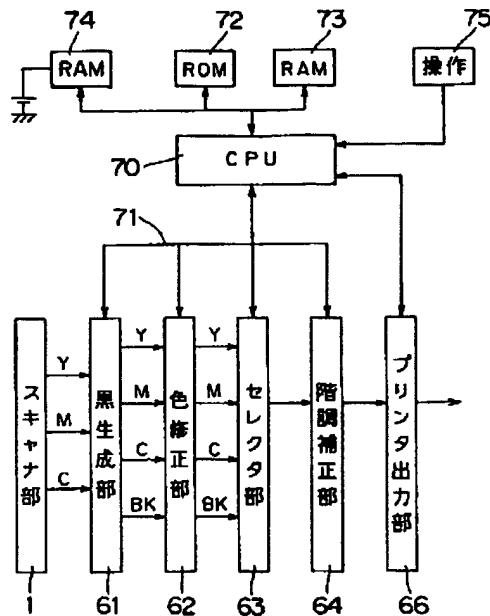
【図1】



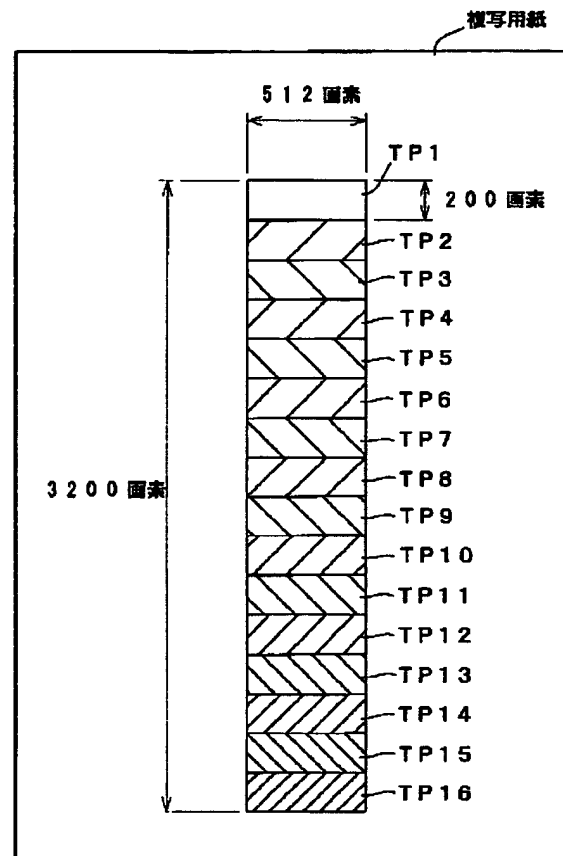
【図4】



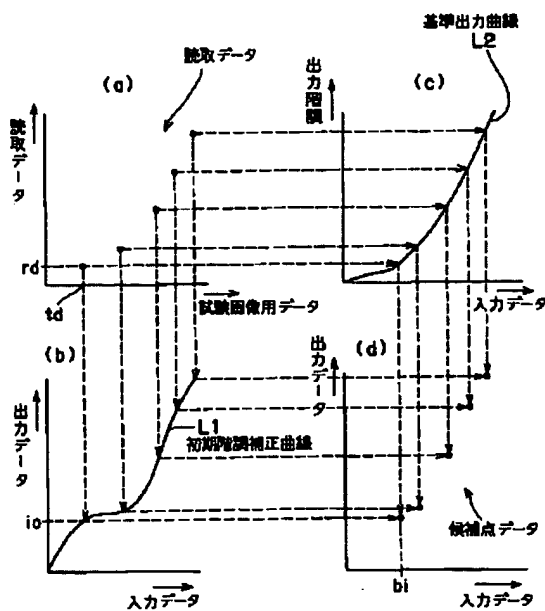
【図2】



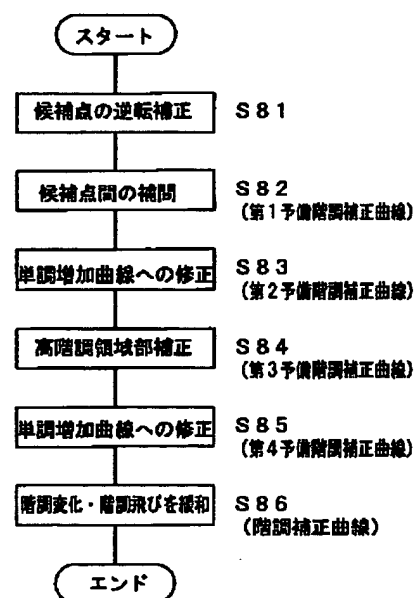
【図3】



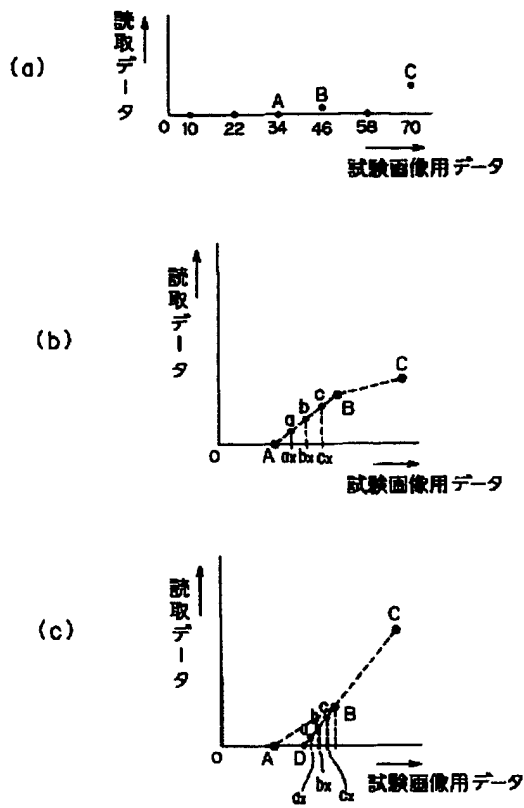
【図5】



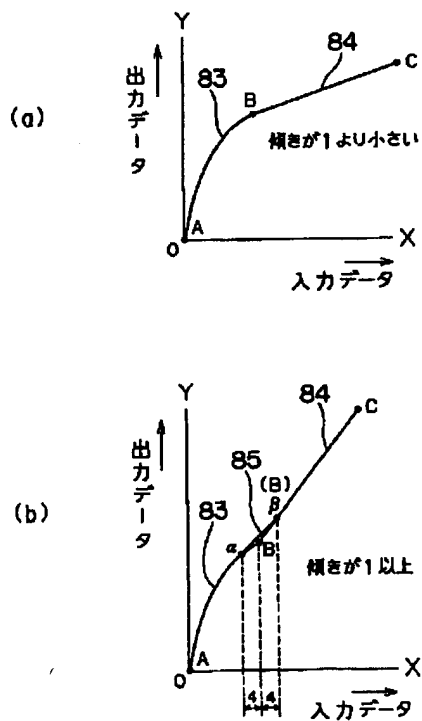
【図7】



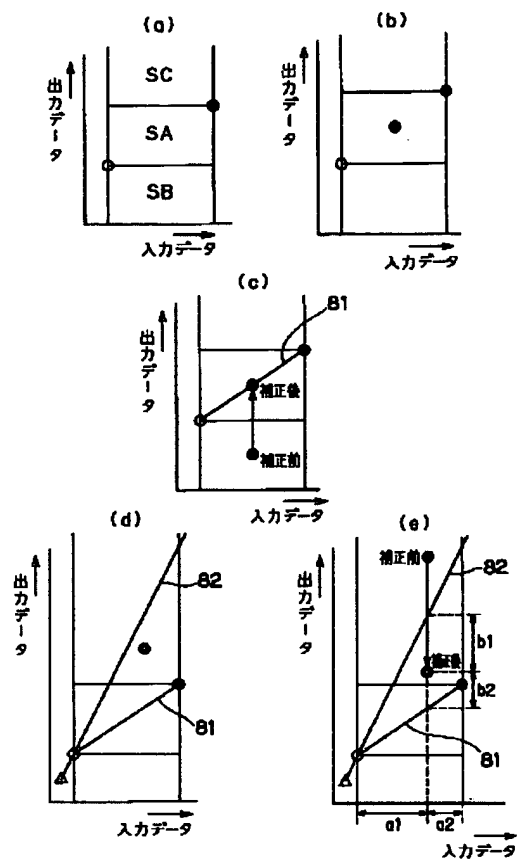
【図6】



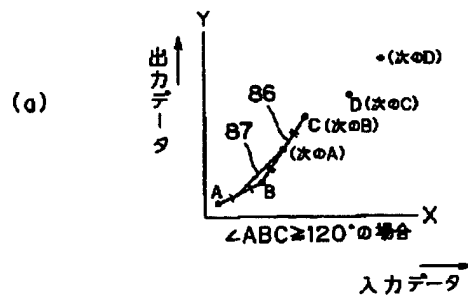
【図9】



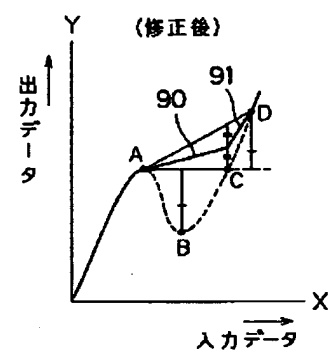
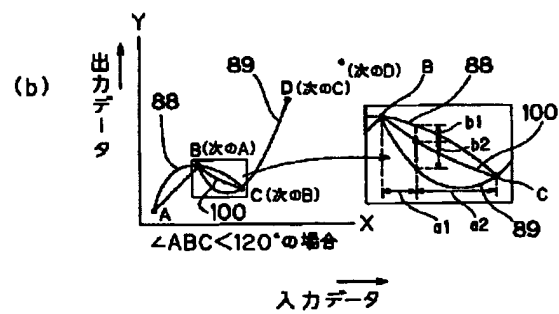
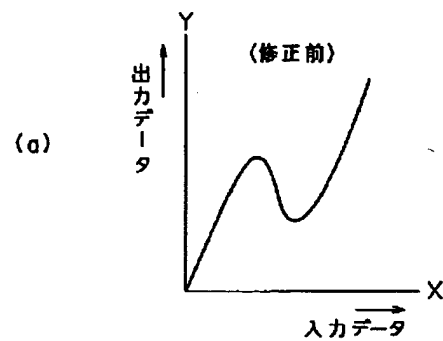
【図8】



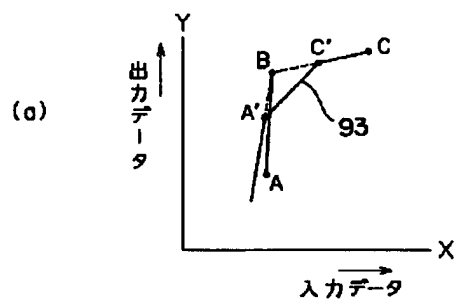
【図10】



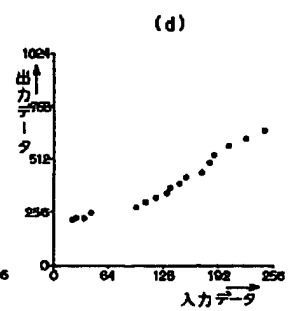
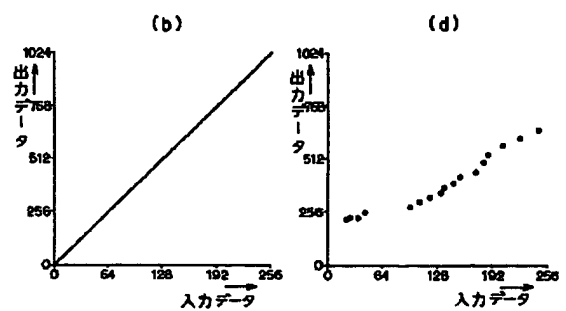
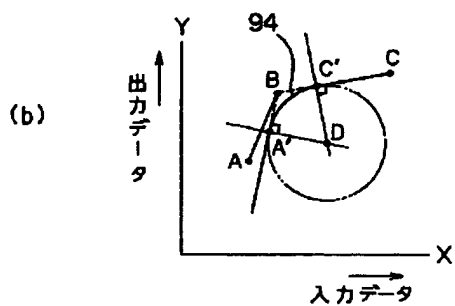
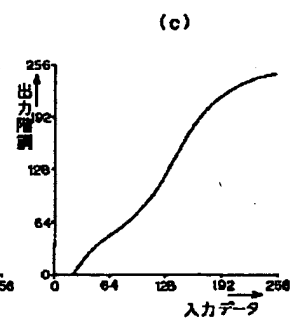
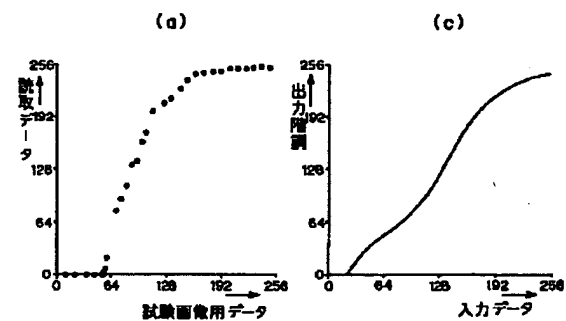
【図11】



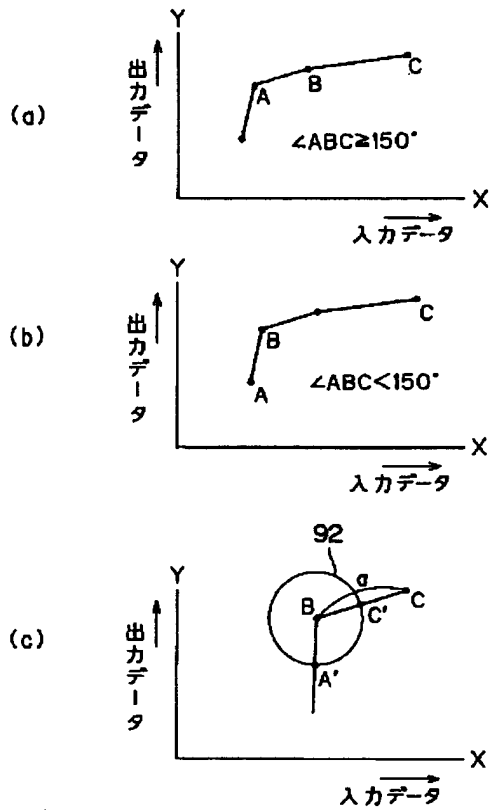
【図13】



【図14】



【図12】



【図15】

